

「それぞれの子どもらしさを求めて」より (六)

名古屋市立大高幼稚園



せんせい おんぶして

かたづけの時、きみ子が積み木の上から教師の背におわれてきた。それをみていたよしみもおわれてくるので、ふたりいっしょに背負って保育室の中をまわる。それをみていた子どもが

「おんぶして」

とあつまってきた。また背おってやるとつぎつぎに

「先生おんぶして」

とあつまってきたり、背おってまわってるところへ、ぶつかってきたりする。ほとんどの子どもが今度は背おってもらおうと、積み木の上ののってまわっている。ひとりずつはめんどうなので、ふたりまとめて背おってやったのだが、かえってそれが子どもの興味を誘ったようであった。みんなが我さきにおわれようとするので、前からまわっている子どもをおしのけるといこと

もでてきた。その中できとしが自分の前にのりだしてくるすぎおに對し、

「なんだ」

というような顔をみせておこっている姿がみられた。

「よし、じゃ今度はきとし君とすぎおちゃんだ」

といつてふたりいっしょに背おってやった。

◇ ◇ ◇

このきとしの態度は年少の頃にくらべると著しい変化がみられる。情緒不安定で表情も暗くだいてやろうとすると、「いい、いい」といって拒絶する。手をつなぐこともうけつけず、教師のあとを二・三步はなれて、ついてまわった入園当初、年少のおわり頃にもこの「おんぶして」ということがクラス全部に広がって背おってやったことがあったが、その時きとしは、みんながおぶさるのをじっとみていた。「きとし君

もいらつゃい」と声をかけると、「いい」という。先生はさとし君をおんぶしたいんだもん」といって強引に背おってやったことなどが思いだされた。おぶさりたいという気持ちが素直にだせなかったのだと思うが、きょうのようすからも最近のさとしの遊びの状態の変化を思う。かわってきているなという目でさとしをみるから、さとしの新しい面がみえてくるのだと思う。このような見方をしていくことが大切であるということ、同じような経験をするたびに思う。

(五歳児 六月二十八日)

ぼく わすれちゃうもん

きょうはじめて、ゆうぞうが、七夕飾りのちょうちんを作った。クラスの子どもがちょうちんを作っているのをみて、

「七夕飾り、何を作ろうかな？」

とひとりごとをいっている。内心はちょう

ちん作りをしたいのだが、自信がないので

「やりたい」

といえないゆうぞうであることが、わかるので、

「ゆうぞう君も、ちょうちん作ってみようか？」

とことばをかけてみた。

「だって、まるくするところできんもん」

という返事が返ってきた。二、三日前に、はじめてちょうちんの製作をはじめたとき、

「やりたい」

といいながら、いざ取り組む時になって、

「ちょっとみとる」

といってしりごみし、友だちの作るのをじつとみていたのである。みながら、もし自分がやるとしたら、まるめる部分ができないということ、考えていたのだと思う。

「できないところは、先生が手伝ってあげるから」

という、ようやく紙に手をだし、取り組みはじめた。まるめるところは、自分でやろうともしないで、

「やって」

と教師にさした。その部分だけ手伝ってやる。やっとできたので、

「がんばってできたね」

と声をかけると、自分で作ったというよろこびで、にっこりと笑い、

「もうひとつ作ろうかな」

といって、ふたつめに取り組んだ。まるめるところは、やはり教師が手伝ってやった。三つめを作るとき

「ゆうぞう君、ひとりでもできると思うよ。一度やってみて」

と、そのまるめる部分をやってみるように声をかけてみた。教師のことばに、抵抗を感ずることもなく作りだし、自分ひとりやりとげることができた。そして、

「いっぱい作らんと、作り方忘れちゃう

もん」

とか、

「先生、毎日これだしといてよ。いつも作るんだから」

などという。このことばから、作れるようになったという、よろこびの気持ちがあふれていることを感じた。きょうは、このゆうぞうだけでなく、みどりもはじめて作りこのふたりで競争のようにして、ちょうちん作りにはげんでいた。

◇ ◇ ◇

製作にかぎらず、すべての活動に対して「ほく、やれんもん」

を連発して、劣等感・自信のなさを示していたゆうぞうは、その日をさかいとして、非常に行動が積極的になってきた。子どもの心が動き出す、そのチャンスをとらえることは非常にむずかしい。

(五歳児 六月二十九日)

ぼくの家

たけひさが

「何か作ろうかな？」

といいながら、紙とはさみをもって作りはじめた。そのかたわらで、子どもたちと七夕の製作をしている教師に、いろいろ話しかけてくる。

「こんな形に切れちゃった」

偶然、おもしろい形にされたものに目・口をかき、ちょうど指人形のようにして、手にはめこみ、

「こんにちは、これが手だよ」

と話しかけてくる。

「こんにちは」

と相手になってやる。

「おうちを作ってあげよう」

次は家作りに取り組みはじめた。四角形に折った紙をもってきて

「ベッドもいるよ」

といいながら思案しているので、窓をあけベッドをつけてやると、次に

「ドアもいるよ」

という。ドアをつけてやると、そのドアに自分で作ったかきをつけ加えていた。次に、煙突をつけてやると、その煙突のところから、しばらくして、

「今は冬だから、ここで火をたくの」といって、何か作っている。

「それストーブかな？」

と聞くと、うなずいていた。ストーブと煙突が通じているというイメージを、そこにあらわそうといっしょうけんめいである。それができあがると、今度は、

「ひとりではさびしいから、もうひとり作ってあげよう。同じの作るんだ」といって前の人形より小さめの人形を作った。

「この子はね、生まれたばかりの赤ちゃんで女の子なんだよ」

と、とても喜んでいた。

きょう一日、たけひさは、この製作にかかりきりであった。次から次へと自分のイメージがふくらみ、それを製作の上に表わそうと、努力しているたけひさの成長した姿をみて、ほんとうに喜びで胸がいっぱいであった。

◇ ◇ ◇

教師の援助に依存することなく、それを足がかりにして、自分のイメージを表現していく。たけひさは、イメージと、能力・技術とがともなわない面がある。たけひさのイメージをこわさないようにしながら、技術面を援助してやったのであるが、その子どもにあった教師の援助の大切さを痛感した。

(五歳児 七月二日)

おばけやしきははじまるぞ

一昨日から続いているおばけやしきごっこを、さきおはきょうもさっそく、

「おばけやしきやる」

と、遊戯室に入り遊びはじめた。遊戯室では、おばけやしきごっこだけでなく女の子たちがレコードをかけ、リズム遊びをしていた。きのうは、女兒のグループがレコードをかけると、男児のグループが、

「やかましい、おばけやしきをはじめなんだ」
と、電気を消してしまふ。女兒も負けずに電気をつけ、続きをしようとする、こんなことのくりかえしをしていた。そこで教師は男児に、

「おばけやしきははじまるぞ、教えてね」
と、女兒といっしょにリズム遊びをはじめたのであるが、このことはかけが、

きょう生かされているように思ったのである。

「今からやるんだから電気つけて」

と女の子たちがレコードをかけて、リズム遊びを始めると、男児が、

「朝がきたぞ」

と、家の中(積み木の家)へもぐりこむ。女の子のリズム遊びがすむと、家から出て、

「夜だぞ」

と、おばけのペーパーサートを出して遊び出す。

◇ ◇ ◇

このように、自然な姿でお互いの立場を感じ合いながら行動する姿がみられた。教師のことはかけによるが、子どもたちは、自分の遊びに満足感とか、充実感ももてるようになってくると、相手の立場も考えられるようになるのではないかと思った。

(五歳児 七月十五日)

かぎをかけてね

四、五人の女兒のグループの中で、遊んでいたはずのやえ子が、園庭にひとりしょんぼりと立っていたので、教師がさそい、いっしょに砂場へ行く。すると、よしみがきて、

「この子だめなんだよ。ここにいなさいといつても、かかってにでていつちゃうもん」という。そしてやえ子に、

「キャンプに行くから、あなた（やえ子）は留守番をしていらっしやい」という。やえ子は、

「ひとりじゃ、さびしいもん」と泣きそうな顔で教師にうったえる。

「ひとりじゃ、さびしいよね。かぎをかけていけばいいから、みんなでいったら」と話してみた。しばらくしていつてみるとやえ子もみんなといっしょに、ブリッジのところまで遊んでいた。おやつ時間で

ことを知らせると、

「あー、おもしろかった」

といつて、ブリッジからおりてきた。



教師は、やえ子の気持ちを理解してやりまたよしみたちを責めることなく、しかも遊びをつづけることができるような、ことばかけをしてやりたいと思った。

「かぎをかける」ということばは自分（教師）ながらうまく行つたと、ひそかに満足味わつたのである。七月十五日の例でもあげたように、「おぼけやしきがはじまる」とき教えてね」ということばかけと同じであると思うが、このような場合よく教師は、「やえ子もいっしょに遊んであげなさい」とか、「仲よくしなさい」とか、命令的、叱責的な口調になりやすい。

自然さの中に教師の指導が、子どもの心情や行動にとけこむようなことばかけ、接

し方をしていきたいと思う。それは子どもと接しながら、子どもと同じ気持ちになろうとするとところで、子どもから学ぶことが多い。

（五歳児 九月十七日）

